

明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

農事組合法人「印内営農 和の郷」代表理事

植原 勇さん

「和(なごみ)」を合言葉に集落全体で農地を守ってきた。これからも力を合わせて取り組む」と話すのは、福知山市の農事組合法人「印内営農 和の郷」代表理事の植原勇さん(72)。

印内地区は同市中心部の北東部に位置し、標高537㍎の烏ヶ岳麓の中山間地。1993年に京都府の事業で18鈔の圃場(はじょう)整備が完了したのを機に整備された農地を守っていかうと、当時の集落内の全農家22戸が参加して印内営農組合を立ち上げた。

2008年には印内営農生産組合に改組し、トラクターなど

「和」合言葉に農地を守る

▶経営理念でもある「和」の石碑の前に植原さん



を導入して水稻を中心とした農作業受託に取り組んできた。

植原さんは2000年まで行政マンとして圃場整備事業を推進してきた経歴の持ち主だ。高齢化が進む中、若い世代に地域の農業を引き継ぐためには、法人化して農地集積を図る必要が

あると考えてきた。

それは自身の住む地区にも当てはまる。自ら先頭に立ち、J A京都などに支援を求める一方、地区内でも話し合いを重ね、今年8月、集落の全農家21戸が参加して農事組合法人を設立した。名称は公募で「印内営農 和の郷」と決定。

「和」は圃場整備事業の時から合言葉にしていたもので、皆で農地を守るといふ強い思いの表れだという。

「法人化で集落内の農地18鈔のうち17・6鈔を集積することができた。集落ぐるみで納得するまで話し合ってきた結果だ」と植原さんは

胸を張る。

今年と同地区以外も合わせて水稻5・5鈔のうち同J Aの指導で酒造好適米「祝」1・4鈔、酒造用掛け米「京の輝き」0・7鈔を栽培した他、丹波大納言小豆や小麦など14・2鈔を手掛けた。今後もこれまで取り組んできた水稻や小豆などの良質生産を続ける方針だが、当然その先も見据えている。

植原さんは「集落内に耕作放棄地がないことが自慢だ。何よりも高品質のため土づくりに力を注いでいる。まずは経営を軌道に乗せ、そして印内集落が誇れる特産物づくりを目指す」と静かに情熱を燃やしている。

法人所在地 福知山市印内石持19の1(電)0773(32)0218(植原さん宅)。

法人概要 2015年8月設立。理事5人、監事2人、組合員21人。農繁期にはパートタイマー約10人を雇用。耕作面積19・7鈔(酒造好適米、酒造用掛け米など水稻5・5鈔、小豆・小麦など14・2鈔)。